

グローバル社会における地域教育について

～アイオワ州をモデルに～

留学課題報告書

2017/8/15

山梨県立大学 野島久美子

今回のアメリカ合衆国での滞在を通し、人や物資、情報が地球規模で移動し、異文化交流が地域社会にまで及んでいるグローバル化社会の中で、国際的舞台で活躍し、また、地域の文化や伝統を守ることのできる人材を育成する、地域の教育についての調査を行った。その調査をもとに今山梨県の地域教育とグローバル教育について考えたい。

多文化社会

グローバル化社会では、より多くの他の国々の人々、文化背景の異なる人々と関わるが増える。アメリカ合衆国は移民の国と呼ばれるほど、世界各国の国や民族の人々が移り住み1つの国家を形成している。2011年の調査では、家で英語以外の言語で話す人の人数は6千人以上になり、そのうちの7%は全く英語を話さずに生活しているということが分かった(あ)。民族や言語、宗教、文化背景すらも違う人々が共に暮らすアメリカでは、アメリカ人とはどの人を指すのか、アメリカとはどのような国なのかということが、大きな国のトピックとなっていた。このような現状をしり、何人かの友人たちに聞いたり、授業内の意見交換などでアメリカ人とは何かということ質問してみた。人それぞれ意見は異なっていたが、多くの人に共通していた答えは、自由というキーワードだった。アフリカンアメリカン2世の男性は、アメリカに住む人は、それぞれ意見や何を信じるかといったことに、自由を権利として保障されているが、自由の意味について1人ひとりがきちんと考え、他人の自由を侵害しないようにしなくてはならないと語ってくれた。欧米系ではあるが、自分の家族がどこから来たのか、何世代前の祖先かも分からないという白人女性は、今の移民のこの先の世代がいつか自分みたいに祖先について忘れていくかもしれないし、逆に民族的文化をアメリカでも継承していくならそれは自由であるべきで、敬意が払われるべきことであると言っていた。また、初回の授業のオリエンテーションで、すべての教員が、お互いの意見を尊重すること、差別的な発言は単位の修得に関わる禁止事項であること、教員の意見もあくまで1つの意見であり生徒の意見と同じだけの意見であることが話された。このことから、自分の意見を相手に伝えることはもちろんだが、相

手の意見や考えに敬意を払うこと、ただ単に否定するのは建設的な会話にならないということを知ることが、この多文化共生の社会において、大切なことであると感じた。また、そのことをコンスタントに学生に伝えていくことが、教員としての役目ではないかと考える。

教育施設と教育の取組み

教育施設の視察として、デモイン・アートセンター、リビング・ヒストリー・ファーム、デモイン・サイエンスセンターの3つの施設に行った。デモイン・アートセンターはデモインの美術館である。主に近代アートを常設展で扱っており、イベント展も金連術についてなどといった少し特徴的なアート展を開催している。この施設には教育部門が併設されており、日本でいう学童クラブのように学校の後や夏休みに預かり、ワークショップを行っている。1つのワークショップに参加することができた。私の参加したワークショップは発明がメインテーマで、子供たちに自由な発想でアートを創るということを教えていた。ワークショップの期間中も、アートセンターの美術展を訪ね、積極的に利用し、教育に生かしていた。アートセンターは寄付を募っていたものの、入場料は無料で楽しむことができ、地域の大学生のインターン生や、ボランティアの方がたくさんおり、作品の解説やナビゲーションをしてくれていた。無料であるせいか、とても寒い時期に子連れの家族や、若いカップルなどが利用している印象を受けた。リビング・ヒストリー・ファームはアイオワの地域に移動してきた開拓者たちが作った農場の発展の歴史や、古い街並みを再現しその歴史を伝える屋外施設であった。いくつかの家や農場は昔あったものをリノベーションや復元して作ったものなので、本物に近い形で色や雰囲気、臭いを体験することができるようになっていた。また、この施設にもボランティアの方がたくさん働いており、各ブースにいる方はまるでそこに住んでいる人のように振舞い、子供たちにその時代の人々の暮らしを伝えていた。デモイン・サイエンスセンターは科学の歴史や生活の中に隠された科学技術について遊びながら学ぶことができる施設であった。施設に最新のIMAX映画館も併設しており、プラネタリウムの上映や、科学にまつわる映画を放映していた。この施設で行われる期間限定のワークショップにはボランティアの方が参加していた。3つの施設に共通していたことは、ボランティアの活用と、親子で参加しやすい仕組みが沢山あったことである。ボランティアの方は、年齢層も幅広く様々な人が参加していた。アメリカは日本に比べ宗教グループの影響がコミュニティの中で強く、幼いころからボランティアに参加することが多いことや、大学が地域での奉仕活動を高く評価していることなどで、地域のコミュニティー

に参加している人が多いこともあるだろうが、日本でも幼少期の頃からコミュニティーに資する姿勢を推進させる地域作りは大切にすべきだと感じた。

アイオワ州アンケニー市の学校

今回の留学期間の中で、たびたび地域と学校の結びつきがとても強いと感じることがあった。前述したように、学生たちが地域の様々な場所でボランティアをしていることもあるだろうが、1番大きな理由は部活動や、学校行事の地域への開放ではないかと思う。例えば、アンケニー市はかなり高校生（14～18歳）のスポーツが、地域の中で重要視されている。私が観戦したアンケニー高校のバスケの試合では、高校生の試合であるにもかかわらず、平日の夜6時から第1試合が開始され、9時ごろに終了であった。この時間の設定は、仕事終わりの保護者が観戦できるように配慮されているため、とても安いチケット代を保護者や学校関係者以外の人からもらうことで、子供たちの活動に必要なお金を作っている。また、地元の大企業に協賛金を支払ってもらうことで、コーチや審判員の給料を賄っているという。チームが強くなればなるほど、あるいは、スター選手がチームにいと、かなり多くの地域住人が試合を観戦しに来るといふ。また、地域の人もOBやOGの方がたくさんいるので後輩たちの活躍や、同級生との再会の場になったりもするので、足を運ぶ人が多いそうだ。このような地域を活性化させ、地域のコミュニティーに根差した教育環境の整備はとても重要なことである。

他の面では、留学期間中に学校見学でアンケニー・セントニール高校の授業を1日見学する機会があった。日本の高等学校と学校のスタイルに大きな違いがあった。例えば、クラスというものは存在せず、大学のように自分で授業を選択するので、時に多学年の生徒がいるクラスがあった。また1日のスケジュールも、朝早いのが得意な生徒向けの朝7:45から始まる授業や、夜に受けることのできる授業があった。他にも、自分の学校にはなく受けることのできない科目を近隣の高校や、大学に受けに行くことができるシステムなど、生徒1人ひとりの個性に合わせた教育ができるシステムになっていた。授業内では、ICTを使っている教員がとても多くいた。ホワイトボードに書き込むスタイルで授業を行う教員は居らず、ほとんどの教員がパワーポイントで授業を行っていた。数学の図形関係の授業では、生徒も専用のアプリを使い学んでいた。ICTの積極的な導入は、今後ますます進む技術革新に対応するためにも、今後テクノロジー関係を専攻しない生徒であっても、基礎的な運用能力を学べるように必要なことである。

これらの経験を踏まえ、私は、今後地域社会のグローバル化の中で地域の文化や伝統を守りつつ、国際社会で活躍できるような人材育成のために、多文化理解のための教育、地域のボランティアを積極的に利用した文化教育施設、コミュニティーに資する姿勢を推進する教育、地域社会に根差した学校教育、ICTなどのテクノロジーの積極的な導入が必要であると考えます。山梨県はこれらの教育を行うための条件が、そろっているのではないかと思います。多文化理解の教育では、山梨県はアイオワ州と長い友好関係の歴史がある。この友好関係をより推進して、アメリカへの渡航あるいはアメリカ学生の来日などのイベントのようなものだけでなく、日本人教員とアメリカ人教員の定期的な意見交換会や、両国の学生同士で同じ題材について、ICTを利用し、意見を交換しながら学ぶといった日常教育の中の国際交流をすることなどが良いと思う。県立博物館のような教育施設への積極的なボランティアの採用や、今現在高校生以下に無料になっている入場料も、小学生などの保護者同伴の場合の保護者入場料の無料化など地域住民が利用しやすい環境を整えていくことなどが、今後の課題ではないかと思います。

参考文献